



# 海外ネットワーク



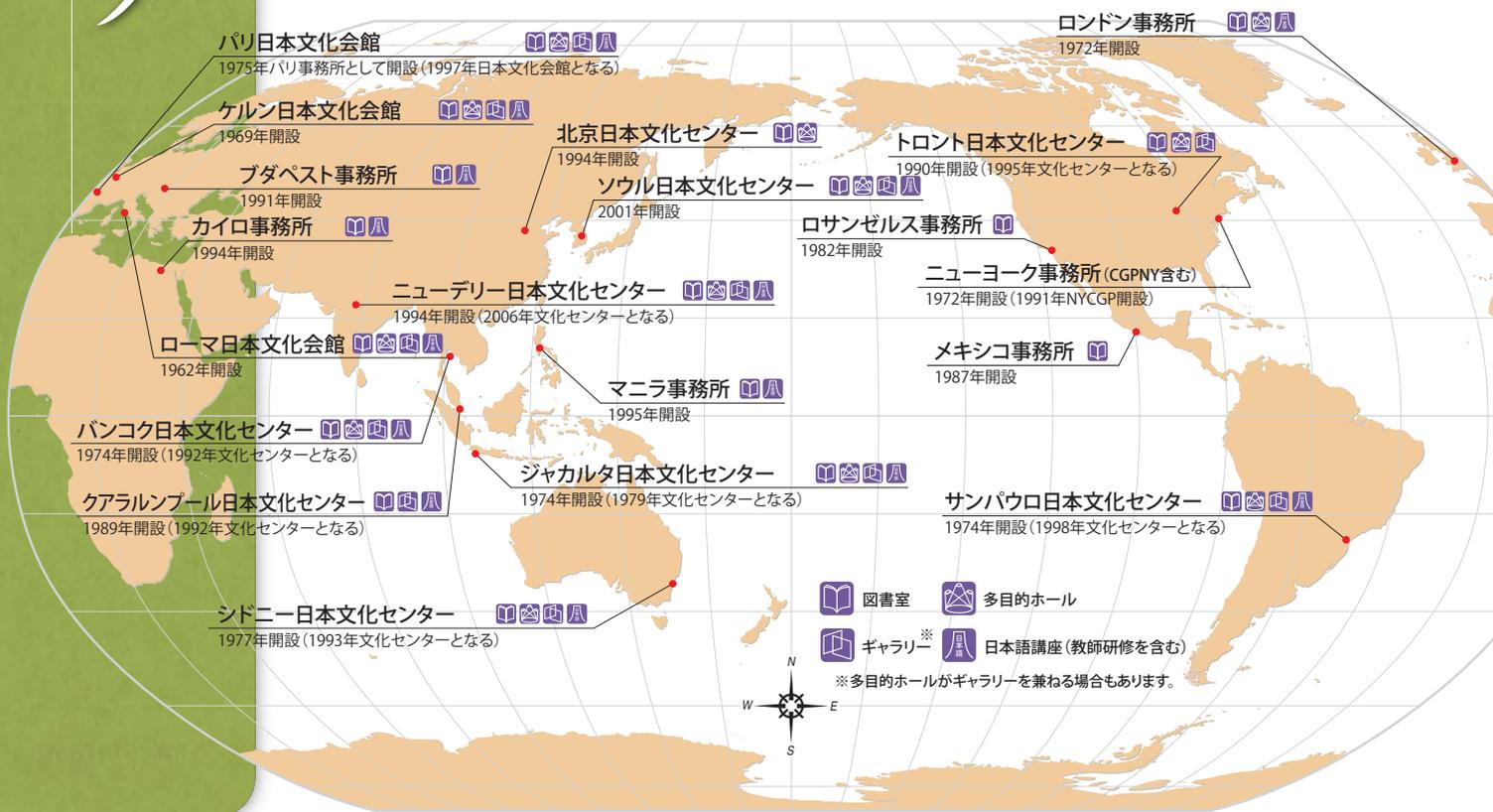
変化していく世界各地の状況にきめ細かく対応した事業活動を展開していくために  
18カ国に19の海外拠点を開設しています。

これらの海外事業所によるネットワークは、国内本部によるプランを  
成功させる原動力でもあります。

ここでは、アジア・大洋州、米州、欧州・中東・アフリカ各地域の事務所の  
活動をひとつひとつご紹介します。

※海外での事業は、現地の在外公館にご協力いただいております。

ジャパンファウンデーションはこのほか、ゲーテ・インスティテュート（ドイツ）、ベルリン日独センター（ドイツ）、カーサ・アジア（スペイン）、韓国国際交流財団、インド文化交流カウンシル等の海外文化交流機関との連携を深めるほか、南アフリカ、イラン、韓国、トルコに海外アドバイザーを配置し、現地の文化動向を把握していきます。



## ソウル日本文化センター



### 日韓市民交流の輪を広げた主催事業

造形美術分野では、グラフィックデザインのポスター展を近年、シリーズで開催しています。今年度は、資生堂の美人顔を作り続けてきた「中村誠ポスター展」を、9月にソウルで開催、約50点の作品展示のほか、映像資料を紹介すると共に、関連の講演会を実施しました。

舞台芸術分野では東京和太鼓コンテストで優勝を飾った女子中高生による「鬼島太鼓」を10月に招へい、蔚山・光州で合計6回の地方公演を通じて大勢の市民に感動を与えました。また、3月には在日コリアン3世・笑福亭銀瓶氏を招へいし、ソウル・光州・釜山で韓国語による落語公演を4回実施、祖国の言葉で日本文化を伝えたいという情熱が

若い人々を中心に熱く広がりました。

日本研究・知的交流分野では、JF出版協力プログラムによって助成され日本文化入門書としてマスコミ等から高い評価を得ている「日本文化の力」を執筆した著者たちによる連続講演会を同じく3月に開催し、ソウル日本文化センターのイオンホールは連日満員の盛況となりました。



ソウル日本文化センターのあるビル



鬼島太鼓の公演風景（蔚山）

Close Up



所長 小林 直人

真の日韓交流・相互理解の更なる増進を目的として、日韓文化交流5カ年計画の具体的・効果的事業実施のため、特に【次世代青少年】【地方】【情報】という3つの交流キーワードを掲げています。

まず次世代青少年交流に関しては日韓両国の若い世代が教育やメディアを通さない感動的で直接の触れあいを積み重ねることが最も重要です。これまで以上に対象年齢の若い参加者を重点化する努力を続けています。

次に地方交流では、全羅道地域アドバイザーや、釜山・済州両総領事館との緊密な連携を通じて、普段日本文化に直接触れることの少ない韓国の地方に紹介を助け、人的な交流を更に活発化させる考えです。

更に広報としての情報交流オフラインでは当センター図書館来館者にきめ細かくて親切な対応に努めるとともに、オンラインではメルマガの充実のほかHPを更新し日韓交流関係団体・機関の情報リンク、ウェブ相談・質問への対応など、双方向の交流を目指しています。

以上のほか、在韓日系企業韓国人社員5万名を超える Seoul Japan Club（日本人会）の一員として積極的な行事連携を通じ「開かれたセンター」としての知名度・認知度向上に努めていきたいと考えています。

## 北京日本文化センター



### 日中関係好転など、転機を迎えた

ジャパンファウンデーションの最重要国の拠点として、さらに機能と施設を充実させるため、北京市東部の中央ビジネス地区への移転を決定し、内装工事と移転準備作業を行いました（2007年5月に新事務所に移転）。

新事業として、中国高校生長期・中期招へいプログラムの実施（→23頁）、中国内陸部における日本文化の発信拠点『ふれあいの場』の第1号を四川省成都市に開設しました（→22頁）。

また、2007年3月には北京・上海・西安の3都市にて音楽グループ Rin' のコンサートツアーを開催し、いずれの



移転後リニューアルした図書館



Rin' 三都市コンサートツアー

都市でも中国の若者を中心に大変な盛り上がりを見せました。2005年度に立ち上げた在中国日本人留学生によるネットワーク「留華ネット」は着実に発展し、幅広い地域で日中学生の交流の輪が広がりました。

## ジャカルタ日本文化センター



### 子どもから大人まで幅広い事業展開を実施

「HARAJUKU」をテーマにしたファッション・デザインの公募を行い優秀な作品の展示を行う展覧会「イケてるハラジク」展を開催し、若者を中心に多くの注目を集めました。また、日本国内のみならず海外でも活発に作品を発表している「青年団」（平田オリザ氏主宰）の東南アジアツアーの一環として、ジャカルタでも「東京ノート」を上演。その他ポスターや絵画の公募コンテスト、国際交流囲碁大会など、より多くの人たちが参加できるような活動のほか、地震の被害があった中部ジャワの子供たち向けの復興関連事業も実施しました。

日本語分野では、当国派遣の日本語教育専門家およびジュニア専門家と連携して、現地日本語教師の質の向上を目指し、各種教師向け研修会および勉強会を積極的に支援しています。また、6月にはシンガポール、タイ、マレーシアおよびフィリピンの日本語教育関係者を集め、バンドンにて東南アジア日本語サミットを開催し、各国における課題等情報交換を行いました。その他、日本語学習者の学習意欲向上のため、高校生・大学生向け（社会人を含む）の日本語弁論大会の



ジャカルタ日本文化センター



青年団「東京ノート」ジャカルタ公演

実施や一般日本語講座（中級・上級）を開講しています。

日本研究分野では、研究者間および研究機関間ネットワーク強化を目指した各種事業に取り組み、イスラム知識人の講演会を大学と協力して行ったほか、日本研究協会（ASJI）との共催で、防衛大学学長の五百旗頭氏を招いてのワンデーセミナーをジャカルタで実施しました。

## バンコク日本文化センター



### 参加型の事業が大好評

#### 日本語教師需要増加で研修の再開も

文化・芸術交流事業では、日タイ修好 120 周年の幕開けイベントとして、東京打撃団と焔太鼓による公演をバンコクのタイ文化センターで開催しました。また、小倉百人一首の歴史やかるた遊びを紹介する講演と、現役トップクラス 2 選手による競技かるたの実演、観客も参加してのかるたゲームや、古今の各種かるた札などの展示など、かるたのレクチャーデモンストレーションを行い、好評を博しました。

日本語事業では、タイの高校における日本語教師の需要増を受けて、日本語教師になる意思のある現職の高校教師を対象とする、日本語と日本語教授法の 10 カ月の長期研修を、タイ教育省との共同事業として再開しました。

日本研究・知的交流事業では、タイの国際交流基金元フェローらによる、日本の地域コミュニティー（高知県馬路村）の発展を紹介し、タイへの応用の可能性を考えるセミナーを開催しました。



バンコク日本文化センター



和太鼓タイ公演 提供：焔太鼓

## マニラ事務所

### 日比友好年事業を実施

2006年は日比友好年と銘打ち、両国の国交回復50周年を記念して1年間にわたってさまざまな事業が全国的に実施されました。

ポップカルチャーの分野では、人気のコンテンポラリーダンス・グループ、コンドルズの公演を実施し、1,500名収容のフィリピン文化センター大劇場が超満員になりました。また今年度は特に舞台芸術における日比共同制作に力を入れました。伝統芸能の分野では、観世流シテ方の指導によるフィリピン人大学生で構成される能楽アンサンブル公演を実施。現代



演劇では、鄭義信氏演出によるホラー・コメディ・ミュージカルを制作し、いずれも大好評でした。

さらにフィリピンは約7,000もの島々から成る国ですが、マニラ首都圏のみならず北ルソン、中部ビサヤや南部ミンダナオ各地方で、全国的な事業展開を図りました。全国48カ所にて実施した前述の能公演は、1万2千名の観客を得たほか、「日本の世界遺産写真展」は全国16会場で実施し、来場者数は2万4千名にも上りました。



マニラ事務所



友好の日(7月24日)記念能公演 ©Joseph G. Uy Jr.

## ニューデリー日本文化センター



### 充実した施設に模様替え インド全域で日本語教育をサポート

2006年9月に、小ギャラリー・多目的ホール・図書館・日本語教室を備えたニューデリー日本文化センターへ模様替えしました。12月4日にはその開所式が行われ、総勢250名の招待客が、茂山千三郎師の大蔵流能狂言公演を堪能しました。

2007年は日印交流年です。1月のインド・イラン・ウズベキスタン・日本合同演劇「演じる女たち」初演を皮切りに、2月には日印交流年オープニング行事として、チェンナイ・プネ・デリーの各都市において、大江戸助六太鼓による和太鼓公演を開催し、デリーでは延べ1,300名の観客が集まりました。3月には観世宗家による能を上演、1,500名のデリー市民が詰めかけ、質の高い日本の伝統芸能を鑑賞しました。

2006年度からは中等教育課程に日本語科目が導入され、ニューデリー日本文化センターはカリキュラムおよびテキスト制作についての支援を行っています。また、日本語教師が不足している現状を打開するため、インドに配置された3名の日本語教育アドバイザーが、インド全域で日本語教育をサポートしています。

このほか、客員教授派遣プログラムにより、デリー大学に池内輝雄国学院大学教授を派遣し、村上春樹や吉本ばななをはじめとする現代日本文学について講義。ネルー大学、バンガロール大学でも出張講演会を行い、好評を博しました。



ニューデリー日本文化センター



大江戸助六太鼓、デリー公演

## クアラルンプール日本文化センター



### 充実した自主企画公演 地方都市での事業展開も積極的に実施

これまでマレーシアではほとんど紹介される機会のなかった日本の現代演劇を紹介するため「青年団」 「KUDAN Project」を招へいしたほか、美術、衣装の専門家を招いて舞台技術ワークショップを開催しました。また、

マレーシアでは初めてとなる「山海塾」の公演は大きな反響を呼びました。1月には「日マ友好年2007」のオープニング事業として和太鼓公演を実施。また、首都圏以外での事業展開にも力を入れ、古武道デモ、映画上映会、田中明彦東京大学教授による日本研究講演会などを地方都市で開催しました。

日本語教育の分野では、教育省が行う中等教育用のシラバス・教科書の作成、教員養成事業に協力しています。また日本語教師対象のセミナーや、中上級向けの日本語講座を引き続き実施しました。



KUDAN Project 公演  
「真夜中の弥次さん喜多さん」



センター内 TATAMI ROOM でのお茶会

## シドニー日本文化センター

2006 年日豪交流年を記念して、さまざまな事業を展開  
等身大の日本文化を伝える数々の事業

文化芸術分野では、津軽三味線の公演『Tsugaru: Soul & Beat of Japan』を国内3都市で開催。美術展『Rapt!』では、展示とシンポジウムで現代日本を紹介するなど、実験的な試みを行いました。「日本映画祭」では、シドニーで19本の日本映画を上映、5,000名を超える観客を集めました。日本研究・知的交流分野では、日豪の国際協力の可能性を探る『日豪フォーラム』開催や、若手研究者のための学術ジャーナル『New Voices』を創刊しました。

## 主要事業の紹介

## ①ワンダーバス・ジャパン 2006

日ごろ日本文化に接する機会の少ない地方都市の子どもたちと直接交流することを目的とした『ワンダーバス・ジャパン』は、2006年5月にクイーンズランド州を2週間にわたって巡回しました。ボランティアのクルーによって企画された和太鼓、踊り、折り紙、書道、茶道などのワークショップやクイズ大会などは、開催地の自治体や学校関係者の協力を得て、合計約9,000名が参加しました。

## ②日本映画祭

2006年で10回目を迎えた『日本映画祭』。シドニーでは日豪交流年を記念して、『Always—3丁目の夕日』など19本の日本映画を上映しました。会期中の入場者数は5,000名を超える人気、そのうちオーストラリア人が8割を占め、映画を通じた日本紹介に大きな手ごたえを感じました。

## ③日豪フォーラム

知的交流の分野では、アジア太平洋地域における日本とオーストラリアの国際協力の可能性を探るフォーラムをマコーリー大学と共催。安全保障や人道援助、などの分野について討議が行われ、日豪双方から招かれたスピーカーと聴衆の間で活発な議論が行わ

れました。日本会場（早稲田大学）との間をインターネット回線で中継。毎回ほぼ会場は満席となり、4回を通じて約1,000名の参加を得ました。



ワンダーバス・ジャパンのクルー



オフィスのあるチフリープラザビル

Close Up



所長 上野 吉之

日豪交流年という記念すべき年を、オーストラリアで経験することができ、大変誇りに思っています。1年を通じて、多くの分野で記念行事が行われ、その数は日本とオーストラリア両国あわせて約1,000件にも上りました。

和太鼓や津軽三味線などの音楽公演、日本の現代を伝えた現代美術展「Rapt!」、日豪両国の国際協力の可能

性を検討した学術フォーラムなど、できるだけ幅広く日本を紹介することに努め、たしかな手ごたえを感じました。

日本とオーストラリアは、アジア太平洋で最も成功したパートナーシップだと言われています。多文化主義を掲げて多くの移民が住むオーストラリアでは、たくさんの国・民族の文化が共存しています。このパートナーから、学ぶべき点もたくさんあると思います。

私たちの事業をサポートし、参加してくださった皆さんに、改めて心から感謝いたします。そして、これをきっかけとして日豪の文化交流がさらに発展していくことを祈念します。

## ニューヨーク事務所

### 多くの人々に現代文学の魅力をアピール 日本研究者ネットワーク支援も積極的に

日本の現代文学の魅力を全米各地の幅広い人々に紹介する目的で、作家の多和田葉子氏と桐野夏生氏を招へいし、それぞれ東海岸5都市と西海岸5都市をめぐる講演・朗読会を実施しました。会場となった各地の大学、書店、読書クラブや図書館では、参加者との間で活発な意見交換が行われました。また、日本文化に触れる機会の少ない地方向けには、南部5大学巡回映画上映会を実施、各地で好評を博しました。

公演については、Performing Arts Japan（舞台芸術紹介日米共同事業）の事務局として、山海塾北米12都市ツアーなど5件の巡回公演、「トリシャ・ブラウン／岡崎乾二郎『I Love My Robots』」など5件の共同創作を支援しました。また、

在米日本専門家中南米派遣事業の一環として、米国で活躍する3公演団を含む5つのグループを8カ国14都市に派遣しました。

さらに、米国アジア学会年次総会など国際会議・シンポジウムの機を捉え、日本研究者のネットワーク形成を積極的に支援しました。



カーネギー・ホールの隣が  
ニューヨーク事務所のあるビル



作家・多和田葉子氏（ブラウン大学で）

#### Clo se Up



所長 辻本 勇夫

アメリカ合衆国の中にある海外事務所は全米の日本語事業を担当しているロサンゼルスと、日本研究や知的交流に関する事業を担当しているニューヨークです。ここには日米センター（CGP）という、日米が協力して知的交流や市民交流を推進するユニークなセクションも併設されています。一方芸術交流はNYとLAでアメリカを東西に分割して担当しています。

ニューヨークにいますと、アメリカとの文化交流とはいったい何だろう、とよく考えます。アメリカは世界中から人が集まって作られた国です。その中でもニューヨークでは、毎日さまざまな人々と出会い、その背後にあるさまざまな世界に思いをはせることになります。

一方、アメリカ人自身が、いつも自らの影響力を意識したり世界中の人々に思いをはせているかという、どうでしょう。アメリカは世界を取り込んでできあがった国でありながら、時として世界から孤立してゆく傾向があるかも知れません。

日本とアメリカの交流とは、双方がお互いを見つめ合いながら、同時に一緒に世界のことに思いをはせてゆく、そんな相互啓発の作業ではないか、と考えています。

## ロサンゼルス事務所



### 日韓アニメ映画上映会・パネルディスカッションを実施

エンターテインメント産業の中心地ハリウッドにおいて、アメリカン・シネマテーク、韓国文化センターとの共催により Korean & Japanese Animation Today と題するアニメ映画の上映会および監督、プロデューサー、評論家によるパネルディスカッションを行い、イベント実施2週間前に予約を締め切るほどの盛況となりました。

また、高知県から手漉き和紙職人2名を招き、ロサンゼルス、デンバーといった大都市に加えアイダホ州やモンタナ州といった普段なかなか日本文化に触れる機会の少ない地方



『時をかける少女』の細田監督と、AACHI & SIPAKのBum-JinJoe監督

日本語教育専門図書館  
「にほんごライブラリー」

でもレクチャー・デモンストレーションを行い、伝統工芸の世界を紹介しました。



## サンパウロ日本文化センター



### 連続講演会「味覚の知恵」シリーズを開始

世界各国が注目する日本文化の一つ、和食。当センターでは同テーマにスポットを当て、2006年秋から連続講演会の企画をスタートさせました。「ヴェージャ・サンパウロ」紙の食文化エディターであるアルナルド・ロレンサート氏（文化人招へいプログラムにて訪日）による和食紹介で幕を切り、その後もテーブルマナー評論家のルミ・トヨダ氏による和風エチケット、サンパウロ大学日本文化研究所教授の森幸一氏による日系移民食文化史、和食シェフ（村上ツヨシ、アドリアーノ金城、カルロス・リベイロの3氏）による対談と、計4件の講演会を実施しました。既存のブームを加速させるだけでなく、「和食」がブラジルで長く愛されるように、2007年度も本シリーズを継続させます。

その他にも、第27回サンパウロ国際ビエンナーレへの日本参加（キュレーター長谷川祐子氏、島袋道浩氏とアトリエ・ワン（塚本由晴、貝島桃代の両氏））やカラオケ日本語学習キャラバン2007、日本哲学討論会などを実施しました。

これらの事業は2006年度から発行されている機関誌「TOBIRA（扉）」にて広報しています。



バラの館庭園(州文化財)とセンターのあるビル



カラオケ日本語学習キャラバン 全国大会(サンパウロ) 入賞者の面々

Close Up



所長 西田 和正

サンパウロ市には大小合わせて約600軒の和食レストランが存在し、日本食文化がブラジル人の生活の中に根付いています。このことから、日系移民の百年に渡る歴史がブラジルの経済・産業面だけでなく、生活の重要な面においても如何に影響を与えているかが分かります。150万人という日系人社会が形成されているブラジルにおいては、単なる日本文化紹介では注目を集めることはなく、もって何が求められているかをよく分析した上で事業を実施しなければなりません。当センターが2006年度より開始しました食文化シリーズは、今や日系六世が誕生し世代交代が急速化する中で忘れ去られていく日本文化の要である食に焦点を当て、講演、対談、デモン

ストレーションを通して日本食文化とそこに秘められた精神論を、2007年12月までの一年半に亘って紹介しています。

一方、日系人の世代交代が進む中で日本語離れが進んでいます。この状況の中で、非日系ブラジル人を含めた若者たちに日本文化・日本語に興味を持ってもらおうと、若者の間で人気の高いアニメ・漫画、コスプレ等のポップカルチャーを活用した「カラオケ日本語学習キャラバン」を企画し、ブラジル全土において実施しました。日本語を如何に楽しく理解してもらうかに主眼を置いたこの企画は、新たな日本語学習方法であるとして各日本語教師の間で取り入れられつつあります。これからのブラジルにおける日本語教育は継承日本語教育から外国語としての日本語教育に替わっていくことから、きちんとした日本語教育が求められています。

2008年はブラジルに日本人が移住してから100年、一世紀という歴史的な年を迎えます。同年は日伯交流年でもあり、これに相応しい文化交流事業を実施していきたいと思います。

## トロント日本文化センター



### カナダ全体への日本語教育促進に尽力 現代の日本デザインを伝える試みも実施

戦後から現在に至るまで日本の少女漫画界に最も貢献のあった23名の作家による200点余りの作品展を開催しました。桂小春團治氏による、英・仏語の字幕による古典落語公演をカナダ4都市で行い、好評を博しました。当センターのホールにて陶磁器デザイナーの森正洋氏の作品展を実施し、同時期にトロント市内で基金巡回展「現代日本デザイン100選」を開催。こうした連動企画は、日本の現代デザインを紹介するよい機会となり、特にデザイン展は地元のマスコミから多くの反響がありました。また、芥川賞作家の多和田葉子氏を迎え、日本語・英語・ドイツ語を織り交ぜた講演会を行いました。トロントの王立オンタリオ博物館(ROM)の高円宮殿下日本ギャラリー開設記念行事として行われた能公演(観世流)への助成も行いました。

日本語教育の分野では、日本語教育アドバイザーをアルバータ州に派遣し、カナダ全体における日本語教育の促進に力を入れているほか、テレビ会議方式による遠隔地日本語教育への支援、日本語教師向けのワークショップ実施を通じた教師の支援などを行っています。



明るく開放感のあるホール入り口



桂小春團治氏による古典落語公演

## メキシコ事務所



### 中南米で多くの日本文化を紹介し 関心を高めることに成功

文化芸術交流事業としては、現代写真展「Out of ordinary/extraordinary」や「自然に潜む日本」展など3つの巡回展を国内8都市で開催したほか、国立シネマテークで新藤兼人監督作品の特集上映を開催。これらの催しは当地の有力紙でも取り上げられるなど、日本の芸術に対する関心を高めることができました。

また、秋にはスペイン語で日本の芸術に関する情報を発信するためのウェブサイト「Arte en Japon」(<http://www.fjmex.org/arte.japon/>)を開設しました。

この他、メキシコに在住する茶道や華道の専門家を近隣国に派遣して、中米諸国における日本文化紹介事業にも協力しています。

メキシコでの日本語学習者数は年々増加しており、2006年には6,300名余りとなりました。こうした日本語教育の進展に対応すべく、当地の教師会と協力した日本語教師への研修会の実施や地方における弁論大会の支援などにより、日本語教育の基盤強化に努めました。

日本研究の分野では、メキシコを中心とするスペイン語圏の日本研究者による「イベロ・アメリカ日本研究学会」の設立を支援。今後ともその活動に協力することにより、中南米における日本研究の発展を目指します。



メキシコ事務所図書室



グアダハララ国際図書館で日本の図書を紹介

## ローマ日本文化会館



**積極的に多分野の日本を紹介  
土曜日開館で利用者層も広げた**

多様な姿を持つ日本文化をバランスよく効果的に紹介することを心がけ、和紙一楮の恵み展、歌舞伎絵展、棟方志功展、天正・慶長遣欧使節とその時代展、ヴェルドーネ撰映画上映会、石井聰互監督特集上映会と同時に、それぞれに関連した講演会を開催。公演事業では、神田山陽氏の講談、座敷舞、素浄瑠璃などの伝統芸能、コンドルズ公演、渡辺香津美氏によるジャズ、若手日本人音楽家のクラシック、細川俊夫氏の現代音楽、演劇「注文の多い料理店」や高野喜久雄氏の現代詩の紹介を兼ねたコンサートなど多様なジャンルを取り上げました。その他、観客参加型の企画として香道と日本武道のデモンストレーション、日本茶セミナーを実施しました。

また、地方においても日本に興味を持つ人が増えていることから、各地の文化団体と協力しながらの地方展開も図っています。本年度は楮の恵み展をファブリアーノ市、ブスト・アルツィオ市で、清水宏監督特集をトリノ国立映画博物館で、素浄瑠璃公演をボローニャ、カリアリ、ヴェネチアで開催するために協力を行いました。



ローマ日本文化会館  
©Mario Boccia



一刀流のデモン  
ストレーション  
©Mario Boccia

さらに、より親しみやすい文化会館を目指し、土曜日午前の開館を開始し、展覧会や庭園の見学、図書館の開館、日本語会話会などを行っています。日本語講座においては、夜間や土曜日に初心者向け短期コースを新たに3種設け、時間的に受講が困難であった社会人向けにもより充実した講座を開講しました。

## ケルン日本文化会館



**時流をつかんだ企画が好評**

「大和の仏像写真」展、日独コミックアート展「ケーゲルブリッツ」、日独アーティストの作品を共通の主題のもとで紹介する「対話展」(2回)、「新世代アーティスト展」を開催したほか、ホールでは日中韓の古楽器によるアンサンブルの演奏や日本茶についてのレクチャー・デモンストレーション、元国際交流基金芸術家フェローによるパフォーマンスなどを実施しました。

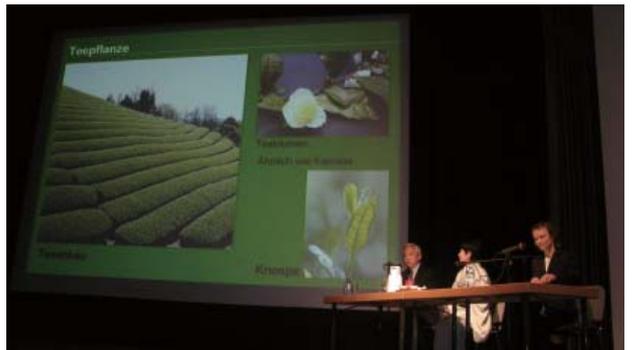
「ケルン訪探! (Expedition Colonia)」「ケルン音楽の夜 (Kölner Musiknacht)」「美術館の長い夜 (Lange Nacht der Museen)」など、他団体との共催イベントにも積極的に参加しました。

また、現代詩人でありドイツ現代詩の翻訳者でもある鈴木俊氏とスイスの詩人・劇作家ベアト・ブレビュール氏による朗読会、徐京植・多和田葉子両氏講演会などのほか、映画部門では成瀬巳喜男氏、中川信夫氏らの監督特集を実施。ドイツの若年層で関心の高まっている日本のホラー映画を上映しました。

また、初級から上級までの一貫した日本語講座を運営し、図書館(蔵書約2万冊)では充実したリファレンス・サービスを提供しています。



日独若手作家対話展 Marco Bohr & Keiko Sato (2006年6~7月)



日本茶のレクチャー (2007年2月) 協力: 一保堂

## パリ日本文化会館

### 画期的な切り口の企画で好評を得る 支援金を生かして実施した事業も多数

2006年度は本部巡回展の現代美術「日本の新世代アーティスト展」で幕を開け、秋には基金本部企画の「KATAGAMI-型紙とジャポニズム」展を開催し、約15,000名の入場者がありました。また倉敷の大原美術館と共催で、世界的版画作家をその肉筆画を含め初めて本格的にフランスで紹介する「棟方志功」展を開催しました。

舞台では「金梅子×大野慶人」および「美枝コカンポ×吉阪一郎、渡辺香津美氏らによる「ジャズ・イン・ジャパン 06」等で日本人と外国人のコラボレーションを行う一方、開館10周年記念第1弾としてダンスグループ「コンドルズ」による異色パフォーマンスを実施しました。また現代演劇の紹介にも力を注ぎ平田オリザ氏作・演出の青年団『S高原から』の7日間上演は画期的なものとなりました。

映画事業では、基金本部企画で31作品を上映した「成瀬巳喜男特集」、10周年記念事業として現存する36作品全てを上映した「小津安二郎大特集」と、それぞれ8,000名以上の観客を集めました。

上記事業は、パリ日本文化会館日本友の会および同館支援協会を通して得た民間企業からの支援金を生かして実施されたものです。

講演会では故・河合隼雄文化庁長官による「源氏物語」、本部企画での山下泰裕氏の柔道講演会が好評でした。

また図書館を運営、茶道、生花、書道、囲碁など教室も開いているほか、日本語教師支援事業を本格的に開始し、欧州日本語教師研修会を初めてアルザス地方で行いました。



©Takemoto Hayuji  
「KATAGAMI-型紙とジャポニズム」展 『中型型紙 牡丹唐草模様』



セーヌ河畔に立つパリ日本文化会館

## ブダペスト事務所

### 日本映画上映会、講演会を毎月定期的実施

4月にブダペスト国際図書展に参加、6月には大蔵流の狂言師による公演を3都市で行ったほか、9月には国立工芸美術館で歌舞伎絵展覧会を行い、吉村文氏による座敷舞の公演でオープニングを飾りました。また、国立フィルムアーカイブ傘下のウルクモズゴー映画館において、月に2回定期的に日本映画を上映し、広く市民に日本文化を楽しむ機会を提供するようにしました。

事務所が市の中心地に移転し、またスペースが広がったことから、図書館閲覧室を利用して、月に1回定期的にハンガリー人による日本関係の講演会を行うようにしましたが、11月には日本滞在記を出版した有名なコメディアンに講演をお願いし、多くの聴衆を集めることができました。図書館の来館者も増え、昨年度と比べて大幅な人数増に恵まれましたし、日本語講座はクラス数を増やし8クラスを週2回運営し、受講者数も大幅に増やすことができました。



ブダペスト事務所図書館閲覧室



美術史家ペトラー二氏講演会 5月

## ロンドン事務所



### 講演会、映画上映会などのイベントが大好評

2006年度は、作家・池澤夏樹氏の講演会、現代日本の家族像を捉えた映画の特集巡回上映「Move Over, Ozu」、ダンスカンパニー・コンドルズ公演「Jupiter」など、現代日本文化のさまざまな姿を紹介する事業を中心に、数々のイベントを実施しました。

日本語教育分野では、従来から行っていたプロモーション事業の機動性を高めるとともに、日本語教育に携わる人材育成の観点も加味して、ボランティアによる StepOutNet 事業を立ち上げました。また、事務所のウェブサイトを通じた情報

発信の一環として、中等教育修了試験のシラバスに対応した教材を発表しました。

また、これまでに基金のフェロシップを受け、現在は第一線で活躍している研究者や芸術家を集めて会合を行い、日英交流の主要な担い手である彼らとの協力関係とネットワークを強化するとともに、高等教育レベルの日本研究支援の重要性を再確認しました。



ロンドン事務所



基金フェローのリユニオン会議

Close Up



所長 松永 文夫

イギリスの大学で日本語・日本研究専攻を希望する生徒が前年に比べ40%も増加したというニュースが最近話題になりました。若者を中心に対日関心が高まっている好機を捉え、より深い日本理解や息の長い交流につながるような事業を展開してゆきたいと考えています。

日本研究振興においては、英国全土に広がる基金創設当初から現在までの日本研究フェローを集めたリユニオン会議を開催。基金とフェロー、フェロー同士のネットワークの強化を図るとともに、今後の日本研究振興や若手研究者の育成の方途等につき議論を深めました。

また、日本語教育の分野では、大学の日本語教育担当者を集め、日本語コースの現状や課題について情報共有や協議を実施。芸術の分野でも、ミュージアム・エデュケーションのセミナーを行ったほか、日英のネットワーク形成にも参画しました。英国の政府関係組織や文化交流団体との連携のほか、当地に進出している日系の企業や団体とのネットワーク作りにも努力しています。

ポップカルチャー等の影響で高まった日本への関心を、より深くより永続的なものとするためには、初中等教育機関や大学、各地の文化芸術団体、政府機関等、より多くの多様な担い手との有機的連携を進めることが肝要だと考えています。

文化芸術、日本研究・知的交流、日本語教育という文化の広範な領域に総合的に対応できるジャパンファウンデーションだからこそできる事業展開を常に図っていきたいと思っています。

## カイロ事務所



### 民間協力を得てさらに広がる日本語事業

中東地域の日本語教師を集めて、カイロにて「中東日本語教育セミナー」を開催し、中東域内の教師の研修やネットワーク作りを促進しました。エジプト国外からの参加者24名を含めて、計62名が参加しました。

日本語事業では更に、エジプト第二の都市アレキサンドリアにおいて、日本語の一般市民講座(受講者52名)を民間協力により開始することができました。アレキサンドリアは地方における日本文化交流拠点であり、日本語講座開設を記念してアレキサンドリア図書館において、当事務所が所蔵する「日本の世界遺産写真パネル」展を実施しました。

芸術交流では、カイロ・オペラハウスにおいて琴・バイオリンによる伝統音楽演奏会、日本人フルート奏者とエジプト人バイオリン奏者等が共演するコンサートを実施し、若者を中心に多くのエジプト人を魅了しました。

また、中東域内拠点事務所として、アンマンにおいて在ヨルダン日本大使館の共催により日本映画祭を実施し、のべ500名以上の観客を集めました。



日本人・エジプト人による室内楽



図書室の閲覧スペース